

## 彙 報

### 昭和 51 年度第 1 回常任委員会

日 時：5 月 8 日（土）午後 2 時～8 時

場 所：東京言語研究所内，本学会事務局

出席者：服部四郎，池上二良，江 実，長谷川欣佑，原田信一，下宮忠雄，  
西田龍雄

欠席者：岸本通夫，関本 至（委任状あり）

議 事：1) 第 72 回大会のプログラムを決定，案内状を作成した。

2) 昭和 50 年度決算について報告があった。

3) 昭和 51 年度予算案が示された。

4) 会費未納者が多数にのぼるのでその対策について協議した。

5) 『言語研究』在庫バックナンバーを第 72 回大会の会場で販売する  
ことになった。

6) 第 73 回大会を名古屋大学（運営委員長：野村正良氏）で開催す  
ることについて協議した。

### 昭和 51 年度第 1 回委員会

日 時：6 月 12 日（土）午前 10 時半～1 時

場 所：学習院大学 本部大会議室

出席者：服部四郎，池上二良，井上史雄，長谷川松治，井桁貞敏，井上和子，  
大江孝男，大東百合子，金田一春彦，日下部文夫，国広哲弥，  
江 実，佐藤則之，柴田 武，鈴木孝夫，田村すす子，徳川宗賢，  
徳永康元，原田信一，平山輝男，小泉 保，野村正良，泉井久之助，  
岸本通夫，蛭沼寿雄，堀井令以知，村山七郎，関本 至，早田輝洋  
（以上 29 名）

下宮忠雄，西田龍雄，大野 晋（以上 3 名オブザーバー）

欠席者（委任状提出者）：佐藤喜代治，梅田博之，奥津敬一郎，小沢重男，

北村 甫, 小林英夫, 佐藤純一, 辻直四郎, 中島文雄, 野上素一,  
服部 健, 林 大, 三宅 鴻, 矢島文夫, 頼 惟勤, 岩井隆盛,  
小島公一郎, 佐藤 茂, 吉町義雄, 池上祝造, 長田夏樹, 五島忠久,  
阪倉篤義, 崎山 理, 寺村秀夫, 林 栄一, 山口秀夫, 藤原与一,  
吉川 守, 大江三郎, 松田伊作 (以上 31 名)

(委任状なし): 川本茂雄, 日野資純, 岩倉具実, 柳井迪夫 (以上 4 名)

(海外出張中): 亀井 孝, 湯川恭敏 (以上 2 名)

報告および議事:

- 1) 去る 3 月に行なった昭和 51 年 52 年度常任委員選挙の結果について会長より報告があった。
- 2) 昨年度第 6 回, 今年度第 1 回常任委員会の議事について会長より報告があった。
- 3) 昭和 50 年度決算報告案が名目等修正の上承認された。
- 4) 昭和 51 年度予算案について会長より説明があり承認された。
- 5) 無記名投票による選挙管理委員選挙を, 諸種の連絡委員等の選挙と同様, 新会長の招集する初年度第 1 回委員会の席上で行なう案が可決された。
- 6) 会長の就任講演はその年度の『言語研究』に公刊することに決定した。
- 7) 第 32 回国際アジア・北アフリカ人文研究会議 (1982 年ないし 1988 年に開催) について江 実氏より説明があり, 同会議が日本で開かれる場合, 学会として協力することになった。但し負担金等の義務はなく, 事務は東方学会が行なうから, 協力とは主として研究面のことであるとの説明があった。なお本年メキシコで開かれる第 30 回会議には三上次男氏が出席の予定であったが病気のため不可能となったので代理として江 実氏が出席することになった旨報告があった。ただし同会議への本学会の代表が西田龍雄氏であることには変わりはない。
- 8) 「研究発表等に関する内規」に関する修正案が可決された。(本年

未発行の「会員名簿」に新会則とともに公刊の予定。) )

- 9) 「選挙細則」の B. の注 1) および注 2) に関する修正案について郵送による全委員の無記名投票により票決することになった。
- 10) 第 72 回大会の費用として学習院大学より 15 万円の寄付があった旨報告があった。

#### 選挙細則の修正案に対する賛否票決

現行の「選挙細則」の「B. 投票が無効になる場合」の注 1) および注 2) の「選挙権、被選挙権を有しない者」の第 3 項に

当年度までの会費を開票前日までに完納していない通常会員とあるのを、「当年度までの」を「当年度の」に、「開票前日までに」を「その年度の 12 月末日までに」と改める案に対する賛否票決を次の日程により行なった。

7 月 9 日 (金) 投票用紙を全委員および会長に郵送；7 月 26 日 (月) 投票  
 〆切 (当日消印有効)；7 月 30 日 (金) 午後 2 時本会事務局にて開票。

その結果は次の通り。

有権者総数 66；その過半数 34；投票者数 48；無効投票者数 1；有効投票者数 47；賛成 45；反対 1；白票 1

よってこの修正案は可決された。予めの話し合いにより、事務局は当年度の 11 月末日までに会費未納者にその旨通知することに決定した。

#### 第 2 回常任委員会

日 時：9 月 25 日 (土) 午後 2 時～4 時半

場 所：東京言語研究所内、本学会事務局

出席者：服部四郎、江 実、長谷川欣佑、原田信一、下宮忠雄、西田龍雄、

関本 至

欠席者：池上二良、岸本通夫 (委任状あり)

議 事：1) 第 1 回常任委員会議事録の承認。

2) 第 73 回大会の案内状の作成。

3) 同大会において「言語研究」バックナンバーを販売することに決定。

4) 倉石、榎垣両氏のネクロロジーについて報告があった。

- 5) 会費の納入状況について報告があった。
- 6) 第74回大会の開催場所について協議した。
- 7) 日本学術会議より昭和52年度文部省科学研究費補助金の配分に係る審査委員候補者を9月30日までに推薦するようにとの要請があったが、選挙を行なっている暇がないので、前回の選挙結果を流用し、蛭沼寿雄氏(第2段)、江実氏(第1段)を推薦することになった。

## 第2回委員会

日 時：10月23日午後0時半～午後2時

場 所：名古屋大学教養部本館1階会議室

出席者：服部四郎，梅田博之，大東百合子，日下部文夫，江 実，佐藤則之，柴田 武，田村すゞ子，徳川宗賢，徳永康元，野上素一，小泉 保，野村正良，吉町義雄，泉井久之助，岸本通夫，蛭沼寿雄，堀井令以知，村山七郎，関本 至，吉川 守，早田輝洋（以上22名）  
西田龍雄，丹羽義信（以上2名オブザーバー）

欠席者（委任状提出者）：池上二良，井上史雄，長谷川松治，井桁貞敏，井上和子，大江孝男，小沢重男，川本茂雄，北村 甫，金田一春彦，国広哲弥，小林英夫，佐藤純一，鈴木孝夫，中島文雄，服部 健，林 大，日野資純，平山輝男，三宅 鴻，矢島文夫，頼 惟勤，岩井隆盛，小島公一郎，佐藤 茂，池上禎造，長田夏樹，五島忠久，阪倉篤義，崎山 理，寺村秀夫，林 栄一，山口秀夫，藤原与一，大江三郎，松田伊作（以上36名）

（委任状なし）：佐藤喜代治，奥津敬一郎，辻直四郎，原田僊一，岩倉具実，栢井迪夫（以上6名）

（海外出張中）：亀井 孝，湯川恭敏（以上2名）

報告および議事：

- 1) 本年度第1回委員会の議事録を承認。
- 2) 第74回大会は，東京女子大学清水護教授が大会委員長を引き受けられたので，同大学において昭和52年6月18日（土），19日

(日)の両日に開催されることになった。同大会の研究発表の公募は来る1月中に行ない、3月末日を以て切る。

- 3) 昭和52年度文部省科学研究費補助金の配分に係る審査委員候補者推薦に関する第2回常任委員会での申合せについて会長より報告があり、承認された。今後は各年度の第1回委員会で候補者を約5名順位をつけて選出しておくことになった。

なお、今後日本言語学会関係で通った同研究費の研究題目、研究者名を『言語研究』彙報に公表することになった。

- 4) 大会あるいは『言語研究』に研究、論文を発表するには当年度の会費を納入済みであるべきこととなった。
- 5) 会員は退会を申出でない限りその氏名は『会員名簿』に掲載するが、当年度の会費を当年12月末までに納入しない会員の氏名の前には×印をつけ、2年分を超える会費を未納の会員は住所・所属・専門分野の欄を空白として、いずれも選挙権・被選挙権のないことを明示することになった。
- 6) 在外会員の会費年 US \$14 を「US \$14 または 3,600 円」と改め、かつ小切手の受入れを停止し、富士銀行本郷支店の普通預金口座 No.241056 (日本言語学会) に払込むことを義務づけることになった。
- 7) 寄贈図書(そのリストは『言語研究』彙報に掲載)は本年度末に国会図書館に寄贈することになった。
- 8) 委員会の招集状は副会長、会計監査委員、常任委員にも配布し、オブザーバーとしての出席を求めることになった。
- 9) 来年ウィーンで開かれる国際言語学会議への本会代表の選挙を来る11月より12月にかけて行なうことを会長が提案し、その日程案とともに承認された。
- 10) 来年度は本会が九学会連合の当番学会となるので、その件に関し日下部委員より説明があり、次の諸氏が理事に選出された。

常務代表 柴田武；経理 内間直人；編集 日下部文夫；

調査 外間守善（調査委員会委員長〔研究代表者〕を兼任）。

- 11) 堀井委員よりの指摘により、今大会の「会員総会」は「会員臨時総会」に訂正された。

第 73 回大会（名古屋大学にて、大会運営委員長は野村正良氏。）

10月23日（土）（午後2時～4時半）

公開共同調査報告および討議

司会 野村 正良

テーマ：揖斐川上流域における甲種系（近畿的）、  
乙種系（東国的）両方言の分布と交渉

- 1) アクセントの分布とその変遷 報告者 杉戸 清樹  
2) 基礎的語彙の分布と系譜 報告者 山田 達也  
3) 徳山村戸入<sup>とにやう</sup>方言について——日本語における一つの  
〈孤立的方言〉の記述的報告と成立過程について  
の二三の考察 報告者 野村 正良  
4) 音素，アクセントに関する音響音声学的所見  
報告者 打田佐太郎

質疑討論は小テーマごとに行い、最後に総括的討議をした。

10月24日（日）

研究発表（午前10時～12時）

- 1) 朝鮮語の味覚表現形容詞——音韻交替と意味内容——  
前田 綱紀  
2) 現代朝鮮語の受身表現について——日本語との対照——  
李 文子  
3) 名詞文の構造分析 荒井 義明  
4) 言語行動における「だ」の用法の分析 藤沢 伸介

会員臨時総会（午後1時～1時半）

研究発表（午後1時半～4時10分）

- 5) フィンランド語における同化と馴化 今津 藤一  
6) ゲエズ語の喉音動詞について 柘植 洋一  
7) 生成的・統計的造語理論の提唱——1800年当時及び

|                           |       |
|---------------------------|-------|
| 現在のドイツ語複合動詞について——         | 渡辺 有而 |
| 8) ゲルマン語の構造的特徴の分布とバルトリ的解釈 | 下宮 忠雄 |
| 9) 対照言語理論についての一考察         | 平川 信弘 |
| 国際会議報告 (午後4時半～6時)         |       |
| 1) 第30回アジア・アフリカ人文科学会議     | 江 実   |
| 2) 第3回国際モーコ学者会議           | 服部 四郎 |

### 故・倉石五郎先生をしのんで

下 宮 忠 雄

本学会の第62回大会(1970年5月16日 於・成蹊大学)において大会運営委員長としてつくされた成蹊大学文学部名誉教授・本会委員倉石五郎先生は1976年5月2日心不全のため逝去された。享年76歳。

先生は明治32年(1899)8月8日新潟生まれ。名門御一家で、中国語の故倉石武四郎氏は兄君にあたる。東大工学部を大正12年に、同文学部独文科を大正15

年にそれぞれ御卒業。先生は「ドイツ語不変化詞の研究」「ドイツ文章論の研究」(ともに大学書林)をはじめドイツ語学関係の著書が多いが、もっとも広く名を知られているのは「コンサイス独和辞典」によってであろう。また「ゲルマニストのための言語学入門」(大学書林)は独文科の学生の間で広く読まれている。

先生は大成後も若い研究者との交流を怠らず、1966年創立のドイツ文法理論研究会(機関誌エネルゲイア、朝日出版社)の研究会や合宿に、東京言語研究所の理論言語学講座に、あの独特のはかま姿でよく参加されたものであった。1967年ブカレスト、1972年ボローニヤでの第10回、第11回国際言語学会議をはじめ言語関係の各種学会に積極的に参加され、新知識を後輩や弟子たちに披露された。未亡人によると1977年ウィーンでの国際言語学会議にも参加されることを楽しみにしておられたという。Requiescat in pace et ex regno caelorum videat Congressum Vindobonae.

## 榎垣 実氏を悼む

阪 倉 篤 義

本学会委員の榎垣 実氏が、去る2月29日に逝去された。75歳であった。生前私は、氏と特に親しくおつきあいしていた訳ではない。氏について語るにふさわしい人は、方言研究家仲間や、同志社大学予科・梅花学園・和歌山大学・帝塚山学院短期大学および関西外国語大学などで氏と同僚であった人たちの中などに、いくらかおられるに相違ない。ここに記すところも、かつて帝塚山での同僚でもあったN氏の教示に負うところが少なくない。

榎垣氏に初めてお会いしたとき、私は、とっさに牝ライオンを連想した。きれいに刈込まれた頭髪と、もんごりした口許に蓄えられた鬘とが、そういう印象を与えたのかもしれない。あるいはまた、現役除隊の後、再度38歳で召集を受け、満州から南支に転戦して百里の行軍に耐えられたという頑丈な体軀と、ゆっくりした京都弁で穏やかに話される懇懇な物腰との調和が、そういう一種の風格を生んだのかもしれない。とにかく氏は、あらゆる面において極めて意欲的でありな



から、また緻密細心でもあった。戦後、氏が中心になって設立された近畿方言学会の機関誌『近畿方言』を、毎号32ページ総て自ら謄写印刷して20号まで発行されたのを見ても、それはわかる。全ページを一面に埋めた几帳面な細字は、ちょっと素人ばなれがしている。そういえば氏は絵心もあって、まことに器用な人であった。

榎垣氏といえば、人はまず『日本外来語の研究』（昭和18年）『外来語辞典』（同41年）をはじめとする外来語研究、『京言葉』（同21年）『近畿方言の総合的研究』（同39年）等々の方言研究、および『猫も杓子も』（同35年）以下続々刊行された語原随筆（氏は語源の字を用いない）や『隠語辞典』（同31年）などの語源研究を想う。しかし、氏は本来、同志社大学英文科の卒業で、大正末から昭和初期にかけては、ラムの『沙翁劇物語』の翻訳や、ブレイクに関する論文など、英文学関係の業績が多数にある。そんなところから、日英語の比較や外来語の研究に興味を懷き、さらに語源・語史の探求に向う一方、出生地京都や教員として20年近くを過された和歌山の方言の考察に没入して行かれたものかと思われる。それらの面で、氏は新村出博士や東条操氏を師と仰いでおられたが、その基礎はいわば独学で築かれたものであった。

帝塚山を定年退職された際の記念出版『あの道この道』（昭和41年）の序文に、氏は、「正直に言って、まだしたい仕事はいくらかもあるが、それを仕上げなくては死んでも死にきれないというようなものは、ひとつもない。つまりどれもこれも道楽仕事ばかりだということだ。わたしの今までの仕事の最も大きな特徴はそこにあるのだろう」と、淡々と述べておられる。クリスチャンとして、人を恨まず妬まず、人それぞれの花を咲かせればいいのだという信条のもとに、悠々とわが道を歩みつつけられた氏は 生涯本当に学問を楽しんでおられたと言うべきであらう。

◇ 寄贈図書リスト（昭和51年7月～10月）

安本美典・野崎昭弘『言語の数理』

筑摩書房（1976, 6）

『現代用語の基礎知識』特装版

自由国民社（1976）

国 語 学 105, 106

国語学会（1976, 6 ; 9）

- 計量国語学 77, 78 計量国語学会 (1976, 6 ; 9)
- 人類学雑誌 Vol. 84, No. 2 日本人類学会 (1976, 6)
- 民族学研究 Vol. 41, Nos. 1 ; 2 日本民族学会 (1976, 6 ; 9)
- 日本民俗学 105, 106, 107 日本民俗学会 (1976, 5 ; 7 ; 9)
- 宗教研究 Vol. 50, Nos. 1 ; 2 日本宗教学会 (1976, 6 ; 9)
- 考古学雑誌 Vol. 61, No. 4 ; Vol. 62, No. 1 日本考古学会 (1976, 3 ; 6)
- 東洋学報 Vol. 57, Nos. 1/2 ; 3/4 東洋文庫 (1976, 1 ; 3)
- 朝鮮学報 80, 81 朝鮮学会 (1975, 10 ; 1976, 1 ; 4)
- 東方学 52 東方学会 (1976, 7)
- 東洋音楽研究 第27回大会 東洋音楽学会 (1976, 10)
- 日本学術会議月報 Vol. 17, Nos. 3 ; 4 ; 5 ; 6 ; 7 ; 8 ; 9  
日本学術会議 (1976, 3 ; 4 ; 5 ; 6 ; 7 ; 8 ; 9)
- 国立国語研究所報告 56『現代新聞の漢字』 国立国語研究所 (1976, 2)
- 通 信 27 アジア・アフリカ言語文化研究所 (1976, 7)
- 東京外国語大学論集 26 東京外大 (1976, 3)
- 日本語学校論集 3 東京外大日本語学校 (1976, 3)
- 立正大学国語国文 12 立正大学国語国文学会 (1976, 3)
- Bulletin of the Kobayashi Institute of Physical Research  
Vol. 18, No.1 小林理学研究所 (1976)
- 大阪教育大学紀要 Vol. 24, I 人文科学 Nos. 1 ; 2 ; 3  
阪教大 (1976, 10 ; 1976, 1 ; 3)
- 研究論集 24 関西外国語大学 (1976, 6)
- 研究報告 Vol. 1, No. 2 国立民族学博物館 (1976, 7)
- ノートルダム清心女子大学国文科紀要 9  
ノートルダム清心女子大学 (1976, 3)
- 内海文化研究紀要 4 広島大学文学部内海文化研究室 (1976, 3)
- 文学研究 73 九州大学文学部 (1976, 3)
- 文科系文献目録 XXIII イタリア学篇 下 日本学術会議第1部 (1976)
- 放送文化 1976, 7 ; 8 ; 9 ; 11 N H K

- カナノヒカリ 1976, 7 ; 8 ; 9 ; 10 カナモジカイ
- エスペラント 57, 1 日本エスペラント学会 (1976, 1)
- Graphication 1976, 7 ; 8 ; 9 富士ゼロックス㈱
- McLendon, Sally : A Grammar of Eastern Pomo, Univ. of Calif. Publications, Linguistics 74, 1975.
- Langacker, Ronald W.: Non-Distinct Arguments in Uto-Aztecan, Univ. of Calif. Publications, Linguistics 82, 1975.
- Průcha, Jan : Soviet Studies in Language and Language Behavior, 1976, Amsterdam.
- Bulletin of the School of Oriental and African Studies, Univ. of London, Vol. 39, Part 2, 1976.
- Die Sprache, Zeitschrift für Sprachwissenschaft, 21, 2, 1975, Wien.
- Wissenschaftliche Zeitschrift der Univ. Rostock, Gesellschafts- und Sprachwissenschaftliche Reihe, XXIV, 3/4 ; 5 ; 6 ; 8, 1975 ; XXV, 1 ; 2, 1976.
- Russkij Jazyk v Shkole 3 ; 4, 1976, Moskva.
- Russkaja Literatura 2, 1976, Leningrad.
- Vestnik Leningradskogo Universiteta : Istorija-Jazyk-Literatura, vyp. 2, 1976, Leningrad.
- Movoznavstvo 3 ; 4, 1976, Kiiv.
- Ukraińs'ka Mova i Literatura v Shkoli, 6 ; 7 ; 8 ; 9, 1976, Kiiv.
- Nashe Rhech, 1 ; 2 ; 3, 1976, Praha.
- Slovo a Slovesnost, 2, 1976, Praha.
- Archív Orientální (Ar Or), 1 ; 2, 1976, Praha.
- Sborník Prací Filozofické Fakulty Brněnské Univerzity, A 22/23, 1974/75, Brno.
- Bulletin d'Analyses de la Litterature Scientifique Bulgare, 1 ; 2, 1975, Sofia.
- Commentationes Humanarum Litterarum 54, 1975, Helsinki.

## 正 誤 表 (第 69 号)

| 頁  | 行  | 誤              | 正              |
|----|----|----------------|----------------|
| 16 | 2  | 調査調告           | 調査報告           |
| 16 | 16 | John C. Perzel | John C. Pelzel |
| 17 | 11 | で代する)。         | で代用する)。        |
| 20 | 7  | ʔpsʔk'əɽdzi    | ʔpɛʔk'əɽdzi    |
| 21 | -2 | 必要があう。         | 必要があろう。        |
| 24 | 9  | (-(u) · k'uma) | (-(u) k'uma)   |
| 28 | -2 | ʔt'oʔaɽri      | ʔt'oʔaɽri      |
| 33 | 13 | 名詞 mul 《水》, も  | 名詞 mul 《水》も,   |
| 35 | 5  | Analyzing in   | Analyzed in    |

◇ 本誌は文部省昭和 51 年度科学研究費補助金の交付を得て刊行されたものである。